

学生会館解放の為に

1974.9.26 明大戦線

[1] 私達の基本的立場

私達明大戦線は、昼夜働き夜間明大下学ぶ夜間部学生としての立場に徹底してしづみつきながら、夜間部学生に対する差別・不平等、抑圧・支配を断じて許さない誇りある夜間部学生の自立した闘い、力強い団結を何よりも追求してきた。もちろん私達夜間部学生個々人の現実は多様である。昼間部をすべきた者もいるし、親のアネをひじっている者もある。しかしながらそれなどうだといふのか。昼間部をすべきた者は尊するに「頭が悪い」のだし、夜間部のきづさは、金だけでなく時間であり場であるのだ。1~2年の頃はアネをひじっていても3~4年になると多くはテメーで稼ぐようになる。私達は、そして更に、私達が跳落してきた者の上におのずと特権者としての自らの現実を背負うのである。

そうした私達の現実を一層厳しくしてきたのが学生会館の封鎖であり夜間（あるいは夜き打ち）ロックアウトそして堅固な管理支配体制である。「とにかく辛の資格を」と打算的に考之なからと、やつぱり勉強したい、サークル活動、自治活動もやりたい、そしていろんな矛盾を許せないと、つまり青年としての当り前の欲求を踏み潰してきたのがこれら大學当局・國家権力の攻撃であった。頭で「大學の命題」としてちる以上に、これらの矛盾は、マルジョア社会の下に於る大學の本質・階級的な特権的な大學の姿を裏切らせてきたのである。学館封鎖・学内管理支配は、私達夜間部学生にとって、容赦するとしないにこりわらず、まさに私達の自主性・自発性と誇りを奪うものなのである。

私達戦線は、71年結成以来（個々人では70年来しているが）常にスッキリと、あるいは「打ちこわし」的に学館解放闘争に向ってきた。「スッキリと」とは前述した様な位置付けにさほどこだわらなかったという意味であり、「打ちこわし的」とは、決して言つところの自然発生的との決め付けではなく、それなりの手順を踏んでの結論としてそうしていったという意味である。そして、71年秋以来連続的に封鎖闘争・解禁闘争を重ね、72年春から本格的に自主管理運動を、フロア会議・新旧学館連絡会議を軸に担ってきた。それら全体的な運動の内容は紹介しきれないが、決してチャレンジしたものではなく立場もマイナリティあり、討論や強固な自主管理組織・機関建設もなかなか進まなかった。それなりに72年秋の学費闘争への大弾圧の中で封鎖され、敗北をきいてきたのである。

^{現在} 学館解放闘争に因る私達の基本的立場とは、こうして、学館封鎖・学内管理支配の下で存在している夜間部学生としてあり、私達の独自性として許してもらえるなら、これを解放闘争に限り敗北し、苦汁を舐めてきた私達の不十分性、諸傾向を真摺し、それへの抗

判を受け、学館封鎖が既成事実化された中でやんできた人々と共に学館解放の事業を進めていく。ということである。

[2] 二れ迄の学館解放斗争の教訓

多く指摘されている様に、明大の学生会館建設は、全国私大の中でも先取り的であり、大学資本からする改良主義的な施策であった。もちろん同時にそれは学生自身の要求を背景とした当局との交渉の上に進められたものである。

69年迄のそつした経過はともなく、70年の大学立法論争闘争を経て、大学当局自身が大學・教育として「大學の自治」の階級性を暴露する中で、学館に対する扱いとおのずと転換してきたのである。70年以降の学館解放斗争は、そつした大学当局と学生の諸関係の転換に規定された形態や内容すなわち実力解放闘争に自然発生性を余儀なくされたと言える。ただその裏には不十分ではあったが、署名活動とか学館特別委の再誕、学生大会やクラス、サークルでの討論等の合法面での取り組みや組織活動があつた卓と明うかにしておきたい。そして、学館を直い出された夜間部サークルなどの主体として十令には結果していなかつたといつ側面もあった。

72年10月以後私達はほぼ全面的に学館を開放し、日常活動の場としてきた。ところがその中で私達が見落してきた部分が確にいた。「入館宣言」を出して格好よく自主管理していく人々の一方で、依然として許可申請を出してゼミ室・教室を使用し続けていた人々がいた。そつに人々に向って「開かないからだ」「日共・民青と同じだ」と決め付けるのは易しいが、実は私達の自主管理運動が、獲得された学生会館、及びそこに入館した部分のみのものに留っていたのである。

又、学館には多くの明大生以外の人々が其に自主管理していく。ここでこれらの人々を学外者などして今後は切り捨てろ、といつのではない。しかし現在、彼らはこの学館封鎖をどう考えているのだろうか。聞いたうえ又戻って来るのだろうか。72年の自主管理運動は、そつした立場、生活基盤の這いあはれ自覚され確認されてはいなかつたのである。まず、明大生にとっての学館封鎖の眞珠を徹底的に実感し我々とのとしない限り、「全人民的課題」などと言って「人民」が困ってしきうだろう。

以上あざりこと簡単すぎるが、現在学館解放連絡会議(準備)始めとする学々が新たに進めている転いこじって若干の教訓となるだろう。

其に、各自の独自性、南り、相互批判を出しあつ中から、一步一步転いを進めていこう。